



TITLE:

臺灣之農業(二)

AUTHOR(S):

神保, 六合男

CITATION:

神保, 六合男. 臺灣之農業(二). 地球 1929, 12(4): 282-292

ISSUE DATE:

1929-10-01

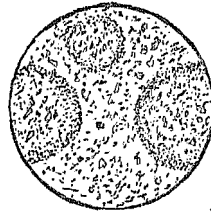
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183668>

RIGHT:

的によく識別せられる程度の岩屑の層は約二米の厚さあり、之れが上層の僅に二〇糎許は頗る緻密で淡青灰色を爲し、豆灰の粒子は略層理に平行して存する。

第二圖



x5

走向は正しく南北に走り、東へ約三〇度の傾斜を測られる。上方には之れに整合して緻密質帶褐色の頁岩が厚さ約一〇米ある。豆灰層の下盤を爲すのも亦頁岩であるが、其一部を觀察

し得られるのみで、他は河畔が耕地であるが爲め未知數たるは已むを得ぬ。思ふに濱田の南約二軒の地にある三階山を盟主とし、南へ本村にも群立する石英粗面岩の山彙があるから、之れに伴ふ凝灰岩で、所謂山間部第三紀層の一つに數ふべく、第三紀瑞穂統の前期に相當する沈降期の堆積物である。鏡下に於て觀察すれば、粒子の構造と周囲との關係もよく分り、降灰中驟雨あり多少の灰を混じた雨滴が、堆積した灰の上を輾轉した當時の地文學的現象を偲ばしめる好資料である。(結) 昭和三、七、二五記

臺灣之農業 (二)

神保六合男

五、農業人口

昭和二年現在で、自作者七十一萬五千五百五人、同戸數十一萬六千八百九十五戸(全農業者戸數

の二九%) 小作者九十四萬四百五十三人、同戸數十五萬九千九百七十七戸(同四〇%)、自作兼小作者七十四萬六千二百五十八人、同戸數十二

萬二千三十一戸(同三一%)計二百四十萬千八百十六人、同戸數三十九萬八千九百三戸を示し、之を明治三十一年の總數百五十七萬八千七百五十人(戸數不明)に比すれば八十二萬三千六十六人の増加を示すも其の割合は三四%増で耕地増加之割合百二十九%に比すれば遙に少い。累年に於ける農業人口及戸數の變化、併びに總人口に對する農業者の割合を示せば左の如くである

累年人口

	人口總數	農業人口	指數	總人口ニ對スル農業者ノ割合
明治三十一年	二六九、〇六八	一七五、七五八	一〇〇	五九%
明治三十五年	三〇〇、七七一	一八九、九三三	一一〇	六三%
明治四十年	三二八、七七一	二〇三、九六二	一二〇	六二%
大正元年	三三三、七三〇	調査ナ缺ク		
大正二年	三三〇、二七三	三九四、八六	一二〇	六三%
大正五年	三三六、一〇九	三七九、五四一	一四四	六五%
大正十年	三七五、二七〇	三三六、七七一	一四一	五九%
昭和元年	四三三、三七七	三七〇、四七	一五二	五七%
昭和二年	四四六、六四四	三二〇、二八六	一五三	五七%

臺灣之農業

備考 指數ハ明治三十一年農業人口ヲ一〇〇トス。
累年農業戸數

	自作	自兼小作	指數
大正十一年	二六〇、〇月二五三、三	二五五、〇月二五五、七	一〇〇
大正十二年	二二九、六	二二九、六	一〇一
大正十三年	二四三、九	二二九、六	一〇一
大正十四年	二四二、一	二六八、八	一〇三
昭和元年	二四九、九	二五三、三	一〇五
昭和二年	二六九、五	二五三、三	一〇四

而して、全人口對、農業人口の割合を見るに前表の示す如く昭和二年末で五七%領臺當時で五九%であつた。爾來累年に於ける其變化を見るに、三十有餘年の間依然として本島總人口の過半數を占め、如何に農業が本島產業界に重きを爲してゐるか窺はれる。

次に昭和二年末現在の各州に於ける總人口及び農業人口竝に其の割合を示せば左の如くである

昭和二年總人口及農業人口並に其割合

州名	總人口	農業人口			總人口を100としたる%		
		自作	自作兼小作	小作	自作	自作兼小作	小作
臺北	七、〇六三人	九、〇九人	九、〇三三人	三、二七六人	二九%	三%	四二%
新竹	六、八四〇	九、八六	七、九四	三、〇九八	二四	三	五九%
臺中	九、九八九	一、八八〇	一、八八〇	三、五九七	二五	元	六〇%
臺南	一〇、八四二	三、三二四	三、四三六	一、八四九	三三	元	六二%
高雄	五、五〇四	八、四三四	二、〇四九	一、四六五	三三	元	六五%
臺東	四、三六三	三、〇八〇	七、六二	三、九五	六七	三	九%
花蓮港	六、二五三	二、四九四	六、九七	九、三三	六〇	一七	六四%
澎湖	六、一八七	四、三六九	二、三三七	一、八三	四四	五	七二%
計	四、四六四	七、一五〇	七、四二八	九、四四三	三〇%	三%	五元%

總人口を100としたる農業人口%

五、農業生産並主要農作物產の概況

昭和二年農業生産物總價額は二億七千二百三十七萬六千六百八十二圓で、本島各產業總價額五億九千三百三十七萬七千七百三十九圓の四六%を占め、明治三十五年の五千七百四十萬四千百六十七圓(本年以前は統計不明)に比すれば實に二億千四百九十七萬二千五百五十五圓の増加で、其五倍餘の生産を見るに至り、此の進歩發達は寧ろ

驚異に値するものがある。今本島主要農業生産物について、近況並變遷の概要を記せば左の如くである。

A、一般農業

米 本島の氣候は米の栽培に適し、一年二回の收穫を行ひ西部諸州が主産地(全產高の九六%)である。領臺以來總督府にて、品種の改良と栽培の奨励に努めたる結果、面目大いに改まり、

其の作付面積、收量、品質等の諸點に於て著しき進歩を示してゐるが殊に近年蓬萊種（内地種米）の栽培盛に行はれ之が取引價格竝内地人の嗜好等の關係上其移出も旺盛なるが爲め、近年本島産米移輸出高は著しく多額に上つて來た。今此等の狀況を數字を以つて示せば、昭和二年末、本島米作面積三十九萬九千百五十一甲（累

年耕地面積比較表參照）にして總收穫高は六百八十九萬八千六百七十二石である。之を明治三十五年の二十五萬二千九百九十八甲、二百八十二萬四千四百二十四石に比すれば、收量に於て一四五%、作付面積に於て七一%の増加に達したことになる。

累年米收量增加率（明治二十九年の收量を基数一〇〇とす）

收 穫 高	明治二十九年	明治三十五年	明治四十年	大正元年	大正五年	大正十年	昭和元年	昭和二年
指 數	100	179	217	217	179	336	395	491

蓬萊米の産額は、昭和二年に於て百二十六萬千九十五石を示し、全産米高の約十九%を占め、臺中州以北を主産地として臺中州（四〇%）新竹州（三二%）臺北州（二七%）にして、就中新竹州桃園大圳配水水田の第一期作の如きは悉く蓬萊種にして該地方の農民は産米全部を内地に移出し自己の食糧として外國米を購入するが如き有

様である。而して大正十一年、蓬萊米産額一石なるに比すれば、實にここ六箇年間の斯種普及の大勢を知ることが出来る。本島米移輸出高は昭和二年中に、二百八十八萬六千五百九石に上り、之を明治三十五年の四十一萬八千五百五十五石に比すると七倍の多額に達し、母國の食糧米補給上我が臺灣は最有力なる役割を務めつゝ

ある次第である。因に嘉南大圳、下淡水溪護岸工事の竣工の曉には、悠に本島産米高を一千万石以上に達せしむる事を得ると云ふ。

次に昭和二年全島産米各州分布状態を示せば左表圖の如くである。

昭和三年米收穫高（單位石）

期	州	臺北	新竹	臺中	臺南	高雄	臺東	花蓮港	合計
第一期		一、四〇六、九七〇	七、二四八、八七〇	一、〇二六、三三〇	三、八六三、三三〇	三、七三三、五七〇	四、四〇三、三〇	六、七五〇、〇〇	三、五五五、二二三
第二期		三、六九六、〇〇〇	五、〇〇〇、〇〇〇	九、〇〇三、四〇〇	九、四四一、四四〇	六、〇〇三、〇〇〇	一、五八八、〇〇〇	三、三三三、〇〇〇	三、四四一、九七〇
計		一、二五三、〇七〇	一、二七九、八七〇	一、九九六、七三〇	一、三三四、七六六	九、八八六、八八〇	六、三三九、〇〇〇	一、二九三、〇〇〇	六、九八七、二〇〇
全體ニ對スル比		一六%	一〇%	二六%	一九%	一四%	一%	一七%	一〇〇%

圖 五 第



（ふ乞を照參圖布分州）◎

甘藷 甘藷は米に亞ぐ食用作物で四時到る所に栽培される、即ち水稻の間作として水田にも乾燥せる畑地にも、丘陵山地の開墾地にも栽培され、若し耕作分布圖を作成すれば中央山脈を除く全島一帯が其分布區に入るのであるが就中臺南、臺中、高雄の三州は甘藷の主産地である。直接食糧となす以外

に養豚の飼料として重要であるのみならず、其の切乾薯は酒精原料として移輸出し、又澱粉原料にも供する。之が累年の生産状況を示せば次の如くである。

累年に於ける甘藷作付面積收穫高の變化

	作付面積		收穫高	
	指數	指數	指數	指數
明治三十一年	四三三〇甲	三五八四六〇斤	一〇〇	一六四四一〇一
明治三十五年	四三三〇	五〇一六三二五	一四三	一四七六六八七
明治四十年	二八七二	三〇六八四五	一四五	一五二四八七三
大正元年	二二五五	二二七六八九	三〇	二二五七九四四
昭和二年				六〇六

昭和二年、甘藷作付面積、收穫高(州別)

	臺北	新竹	臺中	臺南	高雄	臺東	花蓮港	澎湖	計
作付面積	一三二二甲	一〇〇二	二四三三	四四四九	一〇六四	一七〇一	一四四	二七九	二六七〇
收穫高	一五九七七七斤	三三三〇五五	四六六六五三	六六六五五四	二七九五八六	八〇三〇五	三三〇七〇八	二四六九六	三三三九四四

終りに一般農民生産物數量及價額並びに價額百分比を舉ぐれば次表の如くである。

一般農民生産物數量及價額(昭和二年度)
(割合は生産價額の比)

	生産數量	生産價額	割合	備考
米	六九八六七石	一三〇七九五〇圓	八四%	
甘藷	三三三〇七五五斤	二七六八三圓	一五%	
大豆	四七九六石	六四八四圓		
其他の豆類	四三三三石	七〇六六圓		
其他	二七三九石	三〇六六圓		一% 粟・黍・小麥

B、特殊農業

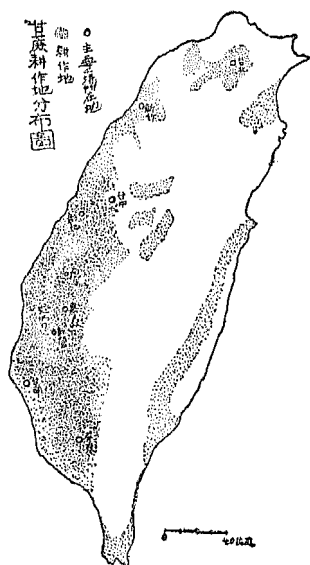
甘蔗 臺灣が帝國の版圖に歸した當時の蔗作地域は殆ど濁水溪以南の畑地に局限せられ、其面積一萬六千甲乃至三萬甲の間にあつた。而して明治三十五年糖業獎勵規則の發布以來専ら、品種の改良、耕作法の改善等に意を用ひ、特にローズバンブー種の水田栽培に成功したるは、本島製糖農業上一大革命を招徠した。之、明治四十一、四十二、四十三年頃の事であつた。爾來總督府に於て適當と認めた場合は、甘蔗苗費、開墾費、灌溉排水費、製糖器具、機械費等に對して獎勵金を交付する方針を取り、尙ほ蔗苗養成所並びに研究所等を設けて極力指導獎勵を行ひ來れる結果、其の作付面積及收量は實に驚くべき發展、發達を遂げ、今や耕地面積擴張時代は過ぎ去り、將に、品種の改良蔗苗の更新灌溉排水の施設耕鋤法の改善等集約耕作に依り單位

累年に於ける甘蔗作付面積及收穫高

面積の収量増進に重きを置くべき時代に到達してゐる。殊に大正九年帝國製糖會社取締役農事部長田原哲二郎氏爪哇に出張して、二七一〇〇丁二七二五〇〇丁、等所謂爪哇、大莖種を持歸り試作の結果灌溉に便なる土地に於ては其の收量著しく多きを知り、該大莖種の栽培盛なるに伴れ、甲當收量は豫期以上の増殖を示しつつある折柄、大正十二、三年以來頗る普及の勢を逞ふし來りたる内地種蓬萊米は水田地方の蔗作に脅威を與ふるに至り、従つて糖業者は此の收量多き大莖種の獎勵普及に依り、採算上蓬萊米と對抗せむとするの氣勢を示し、蔗農亦之に刺戟せられて大莖種の集約耕作に依り益々其收益を増進せむとする傾向を示し、近き將來に於て大莖種全盛時代に入らむとするの狀態を招致した累年に於ける栽培生産の統計的變遷を見るに次の如くである。

圖 六 第

臺灣之農業



茶 粗製茶は本島主要輸出品で其の輸出額年七、八百萬圓に達し、臺中州東勢郡以北に栽培され(茶園分布圖参照)新竹、臺北二州が主産地で、就中新竹州下、大溪、新竹、竹東の三郡と、臺

次に昭和二年に於ける甘蔗作付面積及收穫高を各州別に示せば左の如くである。

	作付面積	指數	收穫高	指數	備考
明治三十六年	一六五六甲	100	六三三九三斤	100	在來種・畑地丘陵地のみによる栽培
明治四十年	三〇九元二	184	二三六四八〇八	203	
大正元年	七五三九	四五六	三九五九六五九	四六三	ローズパンア一種水田栽培開始
大正五年	一四四五一	六九三	五七五三二九〇八	八四〇	水陸栽培
大正十年	一九六八	七五	四九三八三三〇九七	七三	同
昭和元年	三三三三	七五〇	八六〇二四〇元	二六〇	爪哇大莖種繁殖時代
昭和二年	九六九〇	六〇三	七四〇四〇八七	一〇六	同

集約耕作時代↑……(現代)……………

昭和二年に於ける甘藷作付面積及收穫高を各州別に示せば左の如くである。

	臺北	新竹	臺中	臺南	高雄	臺東	花蓮港	澎湖	計
作付面積	三三七甲	六六七	三三九	四三三	一八三	一八九	五三〇		九六八九
收穫高	一四五六五斤	二九七九三	二八七九〇	三六四四四	一四四三七七	五四七九元	三八三九元	七四〇四〇九七	

	臺北	新竹	臺中	臺南	高雄	臺東	花蓮港	澎湖	計
作付面積	三三三七甲	六六六	三三三九	四四四三	一八八六	一八九	五五〇		九六六九
收穫高	一四八六五八斤	二九五九三	三八五九二〇	五七四四四一	一四四七五二七	四四七九元	三八六六六四		四三〇四八九七

第七圖

地

球

第十二卷

第四號

二五〇

五四

茶栽培分布圖

1
2000000

一、蕃園線

○主要取引地

△主要製茶工場

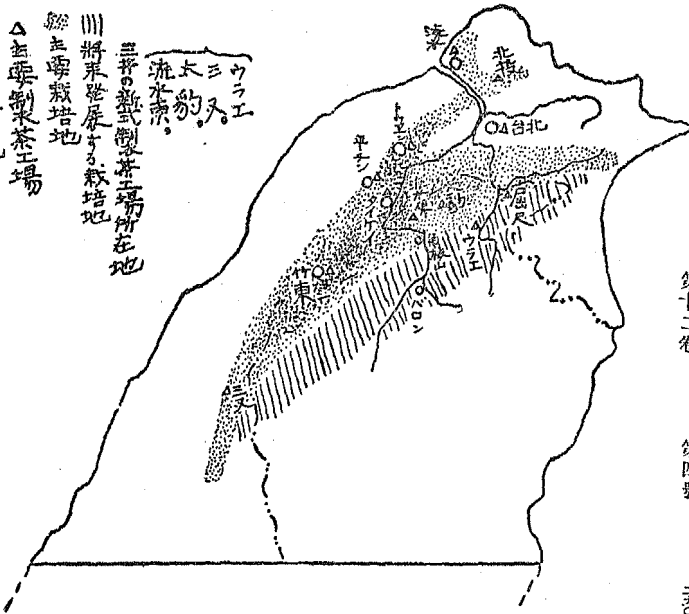
綫主幹栽培地

川將東岸茶場所在地

三井製茶工場所在地

流大ウラエ

三入



北州下、海山、文山、新庄の三郡とより總量の八割以上を産出し、年十數回の摘葉を行ひ其の種類には、烏龍、黄柑、白毛猴時茶、大葉烏龍等があるが烏龍は最も優良種で茶園全面種の六割以上を占めて居る。左に昭和二年度に於ける、各州茶園分布並に其産出高とを表示する。

昭和二年各州茶園分布狀態及產出高

作付面積平地 同 蕃地	產出 高 斤 數	同 金 高	臺 北		新 竹		臺 中		臺 南		高 雄		計
			一六五甲	二六九甲	一〇五甲	一〇五甲	二二甲	三甲	四四六甲	一五五甲	一五五甲	一五五甲	
			一〇四甲	五〇一甲									
			二六五七斤	二九七九斤	一六六三斤	二二五斤	一五〇斤	一三六八斤	一五五七斤	一五五七斤	一五五七斤	一五五七斤	
			二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	二八七四圓	

累年に於ける粗製茶作付面積並收穫高

作付面積	指數	收穫高	指數
明治三十一年	一〇〇	一八六八六斤	一〇〇
明治三十五年	六二	二七四三三	七〇
明治四十年	三三六	二七九七〇	一三〇
大正元年	三三六	三三〇八七	一三三
大正五年	四四六	二五九八二	一三三
大正十年	五五九	一七五八五	九三
昭和元年	四三二	一九九四五	一〇九
昭和二年	四四六	二五九八二	一三三

右表に依り、過去三十年間に於ける、茶園作付面積及粗製茶產出高の變化の狀態を示せば、其の間多少の消長は是を認むるも大なる變化はな

かつたのである。而して最近三井合名株式會社の投資に懸るカオガン蕃地開拓事業は大いに進み、既に大正二十三年の頃、淡水溪、新店溪（分布圖參照）の兩河岸は茶苗の植付を終へ、今や深く蕃界一帯の地に開墾の歩を進め、或は播種に或は幼苗の栽付に之れ努めてゐる。第一期植付の分は平均樹齡四、五年にして、殆ど摘葉に叫ぶ狀態にある。

以上カオガン蕃地開拓は將來に於ける、本島製茶事業の趨勢を暗示するものである。

落花生 落花生は土人の副食物として、又搾油及製菓工業の原料として本島農作物中重要なる位置を占め、年産額二百萬圓内外を示してゐる

而して前提出、分布圖の示す如く、西部海岸乾 四十%を産出する。昭和二年に於ける各州作付
燥地帯が其の主要産地で、殊に臺南州は全量の 面積及收穫高を示せば左の如くである。

作付面積 收穫高	臺北 新竹 臺中 臺南 高雄 臺東 花蓮港 澎湖 計									
	一四三三甲	二二六八甲	五九六甲	一八六六甲	三三六甲	二甲	一〇九甲	四〇五甲	二五二五甲	
收 穫 高	三六四〇石	四〇三三石	七三三〇石	一九九七〇石	四三三三石	四九五石	二五五石	五二〇石	四〇六石	

次に作付面積及收穫高の累年に於ける變化を表
示する。

	作付面積		收穫高	
	指數	指數	指數	指數
明治三十一年	二五四〇甲	一〇〇	一七三〇八石	一〇〇
明治三十五年	一三三九	五二	一〇八七〇	六三
明治四十年	三六九	八四	二四二四四	一四〇
大正元年	一八七三	七二	一六七四四	九七
大正五年	二五七	八四	二〇六七	一二四
大正十年	二四七九	九四	三六六〇	二一〇
昭和元年	二七〇七	一〇五	四四四九	二五五
昭和二年	二七五二	一〇五	四七〇六	二七三

特殊農業生産數量及價額（昭和二年）

	生産數量	生産價額	割合
甘蔗	七三〇八八七斤	四七五五圓	九、一%
粗製茶	一九三九六斤	六五七三圓	一二、三%
落花生	四七〇六四石	二五七五圓	四、五%
黃麻	六八三六斤	九三三圓	一、四%
煙草	二〇六〇五斤	七五二〇圓	一、二%
苧麻	一九三二七斤	五九七九圓	一、〇%
其他		八六五六圓	一、五%
備考	香花作物、胡麻、苳苳、泥藍、菜種、大甲蘭、アロールト		